

平成24年度第2回森林の未来を考える懇談会 発言概要

1 日時・場所

別紙「第2回森林の未来を考える懇談会（現地調査行程表）」のとおり

2 出席委員

8名

3 発言概要

（1）森林環境基金事業全般について

- ・震災以降、森林環境税がどのように使われているか気になっていた。
- ・木質バイオマス利活用でも椎茸施設に入れ地元の産業に活用する等、活用に厚みが増え裾野が広がってきたという印象を持った。
- ・事業成果として、例えば間伐が行われた森林所有者の生の声も聞いてみたい。
- ・第三者機関が取組むことができるなど、幅広い取組みに使われるような仕組みも検討すべき。
- ・見学した木質バイオマス発電は、林業の6次産業化の例の1つだと思われる。
- ・このような先進的なものに対し、パイロット的に支援しても良いのではないか。
- ・「森林と放射能汚染」は、森林と関わる中でどうしても向き合わなければいけない問題だが、これに対し森林環境基金事業でどう関わるかが重要な視点である。

（2）森林整備について

- ・猪苗代町で強度間伐を行った箇所でも、風雪害は発生していないよう感じた。
- ・今年度の現場の間伐材は搬出され、バイオマス発電に使う予定とのことだった。
- ・獣害対策については2つの方策を見た。
 - ①野生生物との棲み分けを図る（磐梯町）
 - ②経済物（木材）を野生生物から守る（西会津町）

（3）内装木質化について

- ・幼稚園の内装木質化は、子供や保護者に好評であるほか、子供の声が反響しにくくなるといった効果もあったという話が園長よりあった。
- ・保育園の事例は、床材等に三島町のキリを使用した地元らしい事例だと感じた。
- ・このような地元らしい事例を、他の地方でもいかに生んでいくかが重要である。
- ・子供に木の良さを伝えるだけでなく、その親たちも木に触れることになったことは良い効果だと思う。
- ・アドリアカフェは、徹底して木材を使っていた事例として参考となった。
- ・木質化の事例を、ぜひ都市部の小中学校へも広げていただきたい。

（4）森林環境学習の実施について

- ・今回見たクマ対策は地域の森林の特性の一つであり、森林環境学習と結びつけると良いのではないか。
- ・森林に放射能汚染という問題が生まれ、市町村が実施する森林環境学習で、森に入っていくにくくなっている状況が生まれている。

- ・より良い森林環境学習の実施のために、学校、「もりの案内人」等のサポート組織、役所の3者を取り持つコーディネーターが必要だと思う。
- ・学校としても、コーディネーターがいれば助かる。
- ・関係機関が作った既存の人材リストを収集し、活用できるようにしてはどうか。
- ・予算配分が前年9月までにわかれば、学校で翌年度の教育計画に森林環境学習を組込むことができる。

(5) 森林環境基金事業のPRについて

- ・今回見た優良事例は点としての取組みであり、これを線や面にするには、いかに県民に広げていくかが重要である。
- ・優良事例を、県民、特に農林業に関係のない人の目にも触れるようにすることが必要である。
- ・県民に森林環境税を負担してもらっているのだから、その取組みを県民に広報することは義務だと考えて欲しい。
- ・「森林づくり、人づくり、心づくり」という、環境税の根底にあるものを県民に知らせることが重要である。
- ・森林環境基金事業として、もっとPRに取り組む必要がある。

以上